



ごん狐

新美南吉

「うわあぬ
すと狐め」
と、どなり
たてまし
た。ごん
は、びく
りしてとび
あがりまし
た。うなぎ
をふりすて
てにげよう
としました
が、うなぎ

ANTENNA HOUSE

ほら穴の近くの、はん [#「はん」に傍点] の木の下で
ふりかえて見ましたが、兵十は追っかけては来ませんでした。

ごんは、ほっとして、うなぎの頭をかみくだき、やっとはずし
て穴のそとの、草の葉の上のせておきました。

十日《とおか》ほどたつて、ごんが、弥助《やすけ》というお百姓の家の裏を通りかかると、そこ、いちじくの木のかげで、弥助の家内《かない》が、おはぐろをつけていました。鍛冶屋《かじや》の新兵衛《しんべえ》の家のうらを通ると、新兵衛の家内が髪をすいていました。ごんは、

「ふふん、村に何かあるんだな」と、思いました。

「何《なん》だろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが」

こんなことを考えながらやがて来ますと、いつの間《ま》にか、表に赤い井戸のある、兵十の家の前へ来ました。その小さな、こわれかけた家の中には、大勢《おおぜい》の人があつまっています

「兵十のお母は、床《とこ》について、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。それで兵十がはりきり [#「はりきり」に傍点] 網をもち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎをとって来てしまった。



だから兵十は、お母にうなぎを食べさせることができなかった。そのままお母は、死んじゃったにちがいない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいとおもいながら、死んだんだろう。ちよっ、あんないたずらをしなけりゃよかった。」

ごん狐

新美南吉



ANTENNA HOUSE

「何《なん》だろう、秋祭かな。祭なら、太鼓や笛の音がしそうなものだ。それに第一、お宮にのぼりが立つはずだが」

「ふふん、村に何かあるんだな」と、思いました。

十日《とおか》ほどたつて、ごんが、弥助《やすけ》というお百姓の家の裏を通りかかると、そこ、いちじくの木のかげで、弥助の家内《かない》が、おはぐろをつけていました。鍛冶屋《かじや》の新兵衛《しんべえ》の家のうらを通ると、新兵衛の家内が髪をすいていました。ごんは、

ごんは、おねんぶつがすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。兵十と加助は、また一しょにかえっていきます。ごんは、二人の話をきこうと思って、ついていきました。兵十の影法師《かげぼうし》をふみふみきました。

お城の前まで来たとき、加助が言い出しました。

「さっきの話は、きっと、そりゃあ、神さまのしわざだぞ」

「えっ？」と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

「おれは、あれからずっと考えていたが、どうも、そりゃ、人間じゃない、神さまだ、神さまが、お前がたった一人になったのをあわれに思わっしやって、いろんなものをめぐんで下さるんだよ」

「うん」

「ごんは、へえ、こいつはつまらないなと思いました。おれが、栗や松たけを持っていつてやるのに、そのおれにはおれをいわないで、神さまにおれをいうんじやア、おれは、引き合わないなあ。」

「うん」

「そうだとち。だから、まいにち神さまにおれを言うがいよ」

「そうかなあ」



このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。

ごん狐

新美南吉

ANTENNA HOUSE

これは、私《わたし》が小さいときに、村の茂平《もへい》というおじいさんからきいたお話です。

ふと眠ると、川の中に人がいて、何かやっている。ごんは、見づからなにもない。そのとき、魚の群がうきうきと泳ぎまわって、そこらへんをのぞいてみました。

「兵十《ひょうじゅう》だ」と、ごんは思いました。兵十はぼろぼろの黒いものをまき上げて、腰のところにまで水にひたしながら、魚をとる、はりきり「#「はりきり」に傍点」といって、網をゆすぶっていました。はおまきをした顔の横ごちのように、まるい萩の葉が一まい、大きな黒字《ほくろ》みたいにくぼりついていた。

しばらくすると、兵十は、はりきり「#「はりきり」に傍点」網の一本うしろの、袋のようになつたところを、水の中からもちあげました。その中には、芝の根や、草の葉や、くさった木ぎれの葉や、ごちやごちやはいつていましたが、でもところどころ、白いものがきらきら光っています。それは、ふというなぎ「#「うなぎ」に傍点」の腹や、大きなきす「#「きす」に傍点」の腹でした。兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみと一しよにぶちこみました。そして、また、袋の口をしぼ

むかしは、私たちの村のちかくの、中山《ななかやま》とていふところに小さなお城がありました。中山をまわるとおとのおまが、おられたのです。その中山から、少しはなれた山の中に、「ごん狐《ごんこ》」とていふ狐がいました。おれは、一人《ひとり》のぼろの狐で、じだ「#「じだ」に傍点」の「ぼろ」はうけた森の中に穴をほって住んでいました。そして、夜でも厚くも、あたりの村へ出てきて、いたずらはかりました。はだけへ入って芋をほりちうたり、菜種《なたね》がら「#「がら」に傍点」の、ほしてあるのへ火をつけたり、百姓家《ひやくしやうや》の裏手につるしてあるとんがりしをむじりつって、いつたり、いろんなことをしました。

「ごん、お前《まい》だったのか。いつも栗をくれたのは」

ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。

雨があがると、ごんは、ぼろとして穴からはい出ました。空はからりと晴れていて、百舌鳥《もず》の音がきんきん、ひびいていました。ごんは、村の小川《おがわ》の堤《つつみ》まで出て来ました。あたりの、すすきの穂には、まだ雨のしずくが光っていました。川は、いつもは水が少《すくな》いのですが、三日もの雨で、水が、どどとまわっていました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきや、萩《はぎ》の株が、黄いろくにごった水に横たおしになって、ちまれています。ごんは川下《かわした》の古ハト《ふるはと》ぬかるみからしび出して、びくのそばへかけつけました。ちよいと、いたずらがしたくなったので、ごんはびくの中の魚をつかみ出して、はりきり「#「はりきり」に傍点」網のかかっているところより下半《しもて》の川の中をながけて、ほんほんなげこみました。どの魚も、「ごん」とていふ言葉を立てながら、じつた水の中へこもりました。